今も続くほほえみ会の支援

代表　渡辺ひとみさん

◆多くの人の協力で

気仙沼市大島地区を主に支援している活動は、現地の仮設住宅に住みながらボランティア団体の代表を務めている、熊谷寿ん子さん（83歳）と連絡を取り合って今も続いている。毎年四回ほど現地を訪問。中型バスで二十数人のメンバーとともに、日用雑貨や野菜、食料品を積んで行くが、そのバスに乗せきれないほど支援物資が集まったので、渡辺さん所有の二トントラックで、ご夫婦で行ったことも。（その際、ともなりグッズを購入して一緒に届け、喜ばれたというエピソードも）

活動はそれだけにとどまらず、年に十回ほどは宅配便でも物資を送っている。

◆さまざまな支援を

全壊したカキの養殖場を復活させるためのオーナー制度があり、一口一万円で会員の方々と一緒に加入した。今年の秋には収穫できるそうで、楽しみにしているとか。

現地では、復興が思うように進まず、生活も苦しいので何とか収入を得ようとさまざまな取り組みがなされている。その一つに「灯火プロジェクト」があり、使い残しのろうそくを全国から集めて溶かし、カップ形のキャンドルに作り替え、八色の色を入れた素敵なキャンドルポットを作り販売している。そのキャンドルを毎月十一日に全国で一緒に灯し、震災で亡くなった方々の冥福を祈りながら、復興を願おうというものだが、渡辺さんも、矢板の葬祭業者の方の協力でろうそくを集めて届けてる。

ほほえみ会の活動には宇都宮の保育園の保護者など、矢板以外の方々の参加もあり、思いやりの絆が強くなっているのを実感している。

◆小さな新しいボランティアの誕生

三年前の「市民力かわら版」に載った渡辺さんの記事を読んで、泉小、泉中の生徒さんが、「何か自分たちでできることはないか？」と相談。「ボランティアとは、ただ募金をすれば良いわけではない。自分たちにはどんなことができるのかよく考えること」とアドバイスした。

その結果、十一月三日の「ともなりまつり」で、気仙沼復興物産市を開き、海苔の佃煮、だし昆布、とろろ昆布などの海産物を売り、益金を寄付することに。

売れ残ったらどうしようかという心配をよそに完売し、生徒たちに笑顔があふれ、渡辺さんも一安心した。

（K・H）

その、泉中学校生徒による復興支援物産市

販売の様子と、参加者の感想

私は、自分たちでは復興支援をすることは無理だと思っていました。しかし、ひとみさんのお話を聞いて、小さいことからでも「役に立ちたい」と思う気持ちがあればできることを知りました。

当日も、商品の工夫や手伝いに来てくださってありがとうございました。「こんなに役に立つことができた」と、思うことは初めてです。（K）

六月に、ひとみさんの被災地支援のお話を伺ってから、子どもたちの「自分たちもなにかしたい！」という思いがつながり、「自分たちにできることは？」と模索し、十一月三日、思いのつまった「かたち」となりました。何もないところから作り上げていく過程は、大変だけれど楽しかったし、私も子どもたちも経験した一つ一つが、とても勉強になりました。

子どもたちへのアドバイス、伴走ありがとうございました。この経験が次に生きることを願って。（T）

大きな声で、「もうすぐ開店です！」

大漁旗も！

私の母が宮城に住んだことがあります。私も宮城に行ったことがあります。自然を囲んで、さわやかになって幸せでした。

気仙沼の復興ができるように祈り続けて私も頑張りたいと思います。（W）

売れるかなー？ハラハラ、ドキドキ！

★現金以外で喜ばれる支援物資ベスト3

①毎日使う生活雑貨（トイレットペーパー、ティッシュ、洗剤など）

②食料品（コメ、野菜、乾麺、出来れば日持ちするもの）

③仮設住宅は狭いので置き場所に困らないもの